

大館郷土博物館研究紀要

火 内

第16号

秋田県大館市の低標高地3地点で観察されたヤマネ *Glirulus japonicus* の記録……………鳥潟幸男…………… 1

2022年5月
大館郷土博物館

紀要名の『火内』とは、元慶2年(878)に律令国家の史書にはじめて表された大館地方の呼称。「ヒナイ」と読み、蝦夷と呼ばれた人々のことば、おそらくアイヌ語の sat(乾いた)pi(小石)nay(沢・谷川)に起因すると考えられ、中世以降は「比内」と記された。

昭和47年(1972)刊行された大館市史編さん委員会発行の『大館市を知る雑誌火内』の誌名を踏襲した。

秋田県大館市の低標高地3地点で観察された ヤマネ *Glirulus japonicus* の記録

Records of Japanese dormice *Glirulus japonicus* observed in three low-elevation sites in Odate City, Akita Prefecture

鳥瀉幸男^{1*}

TORIGATA Yukio¹

¹大館郷土博物館

¹Odate City Museum

¹〒017-0012 秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森 1

*問合せ先: yukio-torigata@city.odate.lg.jp

要旨

秋田県大館市の低標高地3地点でヤマネが観察された。幼獣が含まれていたことから、大館市内では標高の低い場所に繁殖も含めてヤマネが適応していける環境があるものと考えられる。

Abstract

Japanese dormice, *Glirulus japonicus*, were observed at three low-elevation sites in Odate City, Akita Prefecture. The presence of juvenile dormice suggests that the low elevation areas in Odate City may provide suitable habitat, including for breeding.

キーワード: ヤマネ 天然記念物 秋田県 大館市

Key Words: *Glirulus japonicus*, Japanese dormouse, Natural monument, Akita Prefecture, Odate City

1. はじめに

ヤマネ *Glirulus japonicus* は、齧歯目ヤマネ科ヤマネ属に分類される齧歯類で1属1種の日本固有種である(阿部ほか, 1994)。本州・四国・九州・隠岐島後の山地帯から亜高山帯の成熟した森林に生息し、夜行性で樹洞、樹皮・落葉や土の中・小鳥の巣箱などで丸くなって冬眠する(阿部ほか, 1994; 小宮, 2002)。本種の生息域は年々狭められていく傾向があったことから1975年に国の天然記念物に指定され(文化庁)、環境省レッドリスト2007改訂版では準絶滅危惧(NT)に区分されていたが、その後の分布調査により、概ね全国に連続的に分布していることが明らかにされたため、2012年改訂版ではランク外になった(環境省, 2012)。秋田県版レ

ッドデータブック2002では絶滅危惧Ⅱ類に選定されていたが、従来考えられていたよりも広範囲に生息が確認されていることから秋田県版レッドデータブック2020では危険度が下げられ留意種となった(秋田県生活環境部自然保護課編, 2020)。広範囲で観察されているとはいうものの、既存の生息分布図(自然環境研究センター編, 2010; 杉山・門脇, 2014; 環境省自然環境局生物多様性センター)によれば、大館市における事例は非常に少ない。

小型で目撃されにくい本種が、2009年から2019年にかけて、大館市内の低標高地3カ所(長走風穴、大館郷土博物館、山館)で観察されたので、本稿ではこれらの観察記録を整理して報告する。

2. 長走風穴における観察記録

(1) 発見場所

秋田県大館市長走字長走地内 標高187m

(図1 赤丸A)

(2) 発見日時

2016年9月27日昼前

(3) 発見日の気象

最高気温25.3℃, 最低気温18.1℃, 日降水

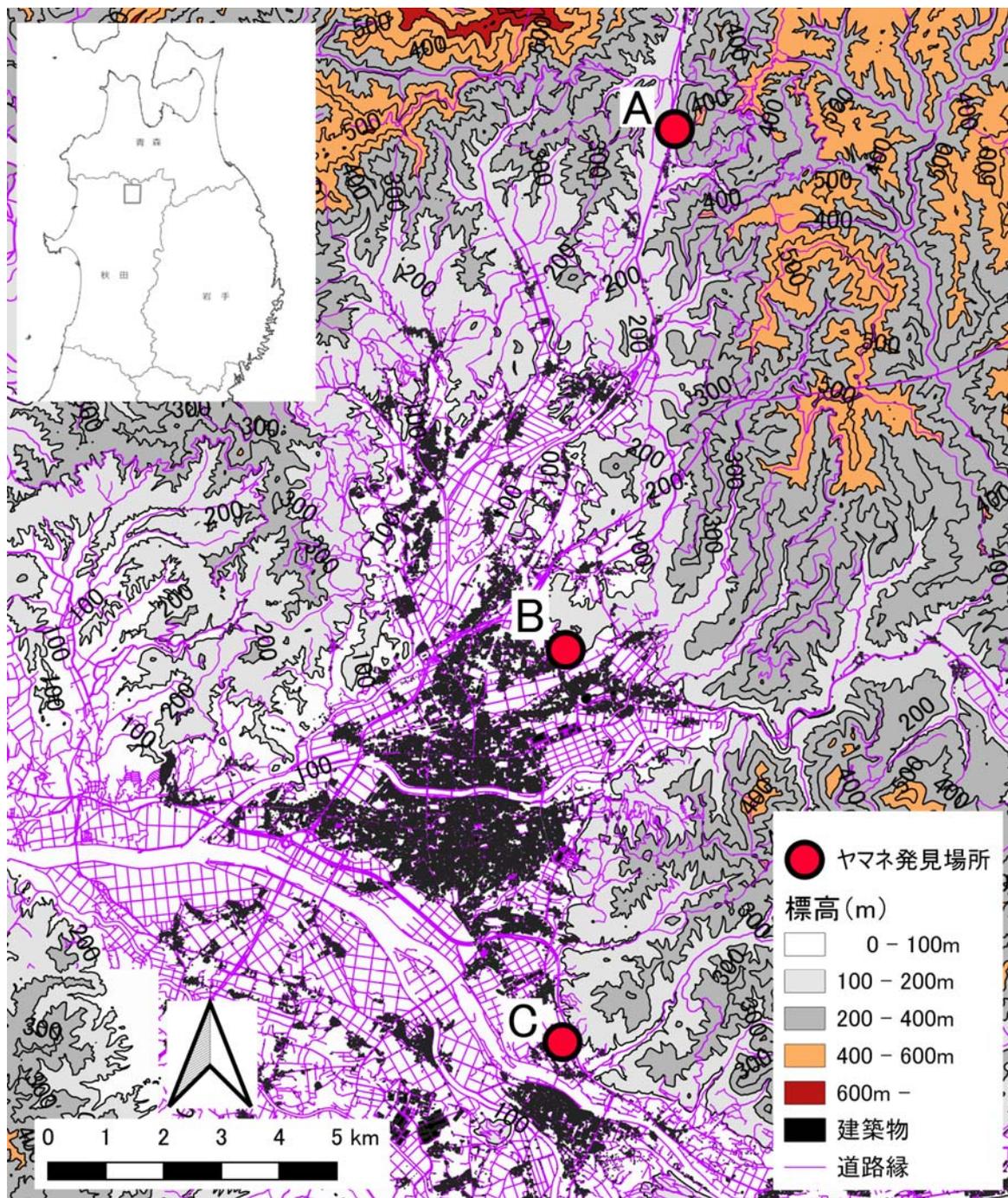


図1 ヤマネが観察された場所の位置図。この位置図は国土地理院基盤地図情報基本項目と数値標高モデル(10 m メッシュ)を使用して QGIS で作成した (<https://fgd.gsi.go.jp/download/menu.php>)。左上の概要図は地理院タイル「白地図」を加工して作成した (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>)。

量21.5mm(降水は発見後に観測),日照時間0.9h(気象庁アメダス「大館」観測値)

(4) 発見者

長走風穴館見学者

(5) 発見時の状況と周辺環境

長走風穴館を訪れた団体ツアーの見学者が風穴2号倉庫周辺の散策路で小動物を拾い長走風穴館の管理人に届け出た。通報を受けて筆者が現場へ急行し個体を確認したところ、背中に一本の黒い筋がある形態的特徴が認められたことからこれをヤマネと判断した(図2, 図3)。自力で歩くことができず、顔面は赤色がかったおり開眼していなかった。頭胴長は約40mmであった。中島(2006)による飼育下の成長記録(頭胴長, 写真)を参照した結果, 本個体は, まだ開眼していないこと, 頭胴長が約



図2 長走風穴散策路で発見されたヤマネ。



図3 長走風穴散策路で発見されたヤマネ。背中に黒い筋が認められる。

40mmであること, 尻尾の毛が非常に短いことなどから生後8日前後の幼獣であると推定された。

発見場所は国見山(454.0m)の西向き斜面に整備されている散策路(石段)の脇である(図4)。発見場所の直上にはナナカマド, 10m離れた場所には樹冠の大きなミズナラの高木があった。このほか周辺にはアカマツ, ヤマツツジ等が分布していた。



図4 ヤマネが発見された長走風穴の散策路。

3. 大館郷土博物館における観察記録

(1) 発見場所

大館郷土博物館(秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森地内)標高86m(図1 赤丸B)

(2) 発見日時

2019年7月3日15時ごろ

(3) 発見日の気象

最高気温28.8℃, 最低気温16.6℃, 日降水量0.0mm, 日照時間7.9h(気象庁アメダス「大館」観測値)

(4) 発見者

松田和華氏(大館郷土博物館職員)

(5) 発見時の状況と周辺環境

2019年7月3日15時ごろ, 大館郷土博物館(鉄筋コンクリート造)3階の廊下の床上の片隅でネズミがうずくまっていたとの情報が当館職員から寄せられた。現場に急行し当該個体を確認したところ綿ごみを体に付着させた小型の

哺乳類が廊下の片隅でじっとしていた。背中に一本の黒い筋が認められたことからこれをヤマネと判断した (図 5)。頭胴長は約 60mm, 体重は 10g であった (図 6)。自力で歩くことができ、開眼していた。中島 (2006) による飼育下の成長記録 (頭胴長, 写真) を参照した結果, 本個体は, 開眼していること, 頭胴長が約 60mm であること, 体重が 10g であること, 尻尾の毛が長いことなどから生後 18~23 日の幼獣であると推定された。

建物は獅子ヶ森 (標高 224.9m) の南西麓に



図 5 大館郷土博物館の廊下で発見されたヤマネ。綿ごみが付着していた。



図 6 大館郷土博物館で発見されたヤマネの体重。

位置し, 住宅街の近傍にある。当建物の背後 (北側) には, 山林が迫っており建物外壁付近まで枝が張り出している環境であった。周辺には, アカマツ, コナラ, ハリエンジュ, スギ, サクラ, クリが分布していた。

4. 山館における観察記録

(1) 発見場所

秋田県大館市山館地内 標高59m (図1 赤丸C)

(2) 発見日時

2009年10月31日夕方

(3) 発見日の気象

最高気温16.0℃, 最低気温1.3℃, 日降水量0.0mm, 日照時間8.3h (気象庁アメダス「大館」観測値)

(4) 発見者

藤原次雄氏

(5) 発見時の状況と周辺環境

大館市内の民家敷地内のビニルハウス (図 7) に置かれていた段ボール箱の中からネズミのような小動物がビニルハウス所有者により発見された。後日, 提供していただいた写真を確認したところ背中に一本黒い筋が認められたことからこれをヤマネと判断した (図 8)。

周辺は耕作地 (畑) および宅地であり山林は無い。最も近い山裾から 200m 離れていた。



図 7 ヤマネが発見された山館のビニルハウス。撮影は発見日とは異なる季節の 2022 年 2 月 23 日に行った。



図8 山館で発見されたヤマネ.

5. 考察・まとめ

本稿では大館市内の3地点で観察されたヤマネの記録を報告した。これらは、既存の生息分布図(自然環境研究センター編, 2010; 杉山・門脇, 2014; 環境省自然環境局生物多様性センター)において、これまで生息情報が確認されていなかった地域2次メッシュ(10km×10km)での確認であり、今回が初の記録となる。また、観察地の標高は長走風穴で187m, 大館郷土博物館で86m, 山館で59mであり、低標高地である。杉山・門脇(2014)の生息分布図によると、東北地方では標高500m以上の地点での観察事例が75%を占め、中部地方では1000m以上の地点での観察事例が82%を占めていた。このように高標高地での観察事例が多いヤマネであるが、本稿で報告した観察事例は、これと対照的で標高が低く人間が活動する領域に隣接していたことが特筆される。特に大館郷土博物館と山館は住宅街の近傍である。これまで単に見逃されてきただけなのか、近年生息域が拡大してきたものなのか不明であるが、2009年から2019年にかけて大館市内の低標高地3カ所で生息が確認され、かつ生後まもない幼獣が含まれていたことが本稿により明らかになったことから、大館市内では標高の低い場所に繁殖も含めてヤマネが適応していける環境があるものと考えられる。

謝辞

ヤマネを発見して情報を提供してくださっ

た長走風穴館の入館者, 大館郷土博物館の職員, 藤原次雄氏・実知子氏, ならびに原稿を確認していただき有益なコメントを頂戴した森林総合研究所の安田雅俊氏, 筑波大学の杉山昌典氏, パシフィックコンサルタンツ株式会社の鬼久保浩正氏に感謝申し上げます。

引用文献

- 阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明(1994):日本の哺乳類. 東京, 東海大学出版会, 195pp.
- 秋田県生活環境部自然保護課編(2020):秋田県の絶滅のおそれのある野生生物—秋田県版レッドデータブック2020動物II. 秋田, 秋田県, 161pp.
- 文化庁:国指定文化財等データベース. <https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/401/3188> (2021.10.11閲覧)
- 環境省(2012):【哺乳類】環境省第4次レッドリスト(2012)新旧対照表<五十音順>. <https://www.env.go.jp/press/files/jp/20559.pdf> (2021.10.11閲覧)
- 環境省自然環境局生物多様性センター:いきものログ. <https://ikilog.biodic.go.jp> (2022.4.29閲覧)
- 小宮輝之(2002):日本の哺乳類. フィールドベスト図鑑12, 東京, 学研, 255pp.
- 中島福男(2006):日本のヤマネ改訂版. 長野, 信濃毎日新聞社, 179pp.
- 自然環境研究センター編(2010):第3部動物分類群別分布図哺乳類. 日本の動物分布図集, 山梨, 環境省自然環境局生物多様性センター, 53-88. <https://www.biodic.go.jp/kiso/atlas/pdf/3.mammals.pdf> (2022.1.8閲覧)
- 杉山昌典・門脇正史(2014):インターネットを活用したヤマネ *Glirulus japonicus* の全国分布調査. 哺乳類科学, 54, 269-277.

大館郷土博物館研究紀要

火 内

第 16 号

2022 (令和 4) 年 5 月 31 日発行 (オンライン)

編集 大館郷土博物館
発行 大館郷土博物館
〒017-0012 秋田県大館市釈迦内
字獅子ヶ森 1 番地
TEL 0186-43-7133 FAX 0186-48-2512
Email kyodokn@city.odate.lg.jp

